

先天視覚障害者の歩行における概念形成訓練

日本ライトハウス
芝 田 裕 一

はじめに

社会福祉法人日本ライトハウス職業生活訓練センターには職業訓練部門、生活訓練部門あわせて約100名の訓練生が入所（入寮、通所を含む）しているが、当センターでは中途視覚障害者だけでなく、先天視覚障害者も数多く訓練を受けている。歩行訓練の面ではこの両者には能力、進度、問題点等において少なからず差がみられる。

歩行訓練の内容は集約して考えると移動面、定位面の訓練に大別される。屋外訓練は、まず、タッチテクニック、白杖による伝い歩きなどの白杖使用技術の獲得等、かなり移動に主眼が置かれているものから始め、各種回避、交差点発見・横断訓練等、移動を主にしながらも定位の色彩を濃くするもの、コース選択、口頭ファミリアゼーションによる目的地発見等、かなり定位面に重きを置くものへと移っていくよう、その大目標は、①移動→②移動+定位→③定位と変化していくものである。前述の中途視覚障害と先天視覚障害者の一般的な差をこの進度の点でみてみると、移動能力の獲得に主眼が置かれる訓練初期は、これまでの歩行（移動）経験の豊富さ、それによる不安度の低さ等の理由から相対的に先天視覚障害者が能力の高さを示すことが多い。ところが、定位訓練に比重がおかれる始める段階に入ると、逆に中途視覚障害者の方が勝る結果となる。先天視覚障害者の中には、前述の②移動+定位の段階すでに定位能力の低さを露呈してしまうケースも存在する。

もちろん、これはすべての先天視覚障害者にあてはまるものではないこと、また、障害を負った時期（年齢）によっても差のあることを前もって断わっておかなければならないが、一般的に、先天視覚障害者が定位に必要な方角、環境の成り立ち等の知識の不足、つまり、概念の形成が不十分であることは事実

である。この先天視覚障害者の定位面における能力の低さを示す例は枚挙にいとまがないが、ここでは、区画の成り立ちの指導を通して先天視覚障害者の概念形成訓練について論じてみたい。

I 概念形成とその訓練

歩行に必要な基礎知識としての概念には、方角、区画・交差点等の環境、コース選定に必要な幾何学的図形、上記のことがらを表現するための言葉などがある。視覚障害者の歩行にはこれらを基礎とする定位能力が要求されるが、これらの概念形成が不十分な先天視覚障害者の概念形成はどのように訓練すればよいのだろうか。この問題を解決する前にまず、晴眼児の概念獲得過程について考えてみよう。

概念は具象的抽象的な言語的指示対象を刺激として認知し、それを論理的範ちゅうに組み込むという分類操作を経て、最終的に要約一般化することによって形成、獲得される。しかし、一つ一つの概念は、この言語的指示対象を作為的に晴眼児に与え、認知させることによって形成されたものではない。あくまでも自然な形で具象的なパターンを反復して経験することにより、形成、獲得されてきたのである。部分的には両親、教師など周囲から教授されたものはあるにしても、この自然な形と反復というのが概念形成過程には非常に重要なポイントになっている。

たとえば、「区画」の概念は他からの指導を受けて形成されたものではない。くり返し、歩行することにより、自然に形成されたものである。つまり、ある目的地から他の目的地への歩行の際に、一つのコースを使用していた児童は、それを反復することにより、迷うというような試行錯誤的行動、家族や友人等の他人の歩行コースの模倣、他からの指導というより積極的な働きかけなどを経験して偶然的あるいは必然的に第2のコースを学習し、これをまた反復して使用する。同様の理由で第3、第4と新しいコースを覚えることにより、一つの事実、「ある場所から他の場所へは複数の方法（コース）での歩行が可能である。」を意識とは無関係に学んでしまう。このように、単純な具体的な事象を

反復して積み重ねることにより、「区画」の概念が自然にかつ確実に形成されるわけである。理屈や「なぜそうなのか」はこの段階ではまだ理解されず、後に順序立てた説明を受けるなり、自ら分析することにより理解するのである。この概念形成は幼児が言語を獲得していく状況に類似している。文法的な知識の指導がなくても、他からの働きかけ、模倣、反復により言語は獲得される。理屈は後から追尾する形である。

先天視覚障害者と一口に云っても、その失明時期、過去における経験・体験の質及び量、知能により、概念の獲得レベルには大きな差異が見られる。当然、先天視覚障害者でありながら、概念形成上に大きな問題点を見い出せないケースもあり、一概に、「先天性だから」ときめつけられない。そのため、歩行訓練と同様、概念形成訓練においてもどのケースに対しても適切であるというオールマイティーの訓練方法は数少ない。歩行訓練の場合、全体的なカリキュラムの流れは、そのケースを各レベルによってグループ化することによっていくつかの種類に大別されるが、その瞬時の行動に対する詳細な指導法に至っては100ケースに対して100通りの方法があると言っても過言ではない。概念形成訓練においてもその訓練生の能力のレベルにあった適切な方法がとられなければならない。

先天視覚障害者の概念形成訓練は、一般的に我々が英語などの外国語を学習する場合と同様、理屈で理解させるという指導方法がとられているが、これは成人の場合、絶対訓練時間数が限定されるという理由からやむを得ないものである。この訓練方法は、方角、環境等についての知識を言語的かつ具体的な説明によって理解できる潜在的能力をもつ先天視覚障害者には有効である。しかし、一定の能力を下まわる、つまり、成長過程における経験不足によってこの潜在的能力のない訓練生にはその能力のレベルに応じて、前述のように、まず、現象、事実を理屈抜きで与えるだけの指導を時間をかけて行ない、後にその成り立ち、構造を説明するという方法が適切な場合がある。本訓練ではこの方法を探っている。

また、概念は定位にとって必要欠くべからざるものではあるが、方角や環境

についての知識がいささか不十分でも、今までの歩行経験により、歩行範囲はある程度、またはかなり限定されるが、歩行そのものにはいささかも支障をきたさないケースも存在する。だから、先天視覚障害者の場合、訓練の時間的余裕、そのケースの将来、歩行するであろうと予測される地域、その地域での歩行形態、そのケースの概念に対する理解力を含む潜在的能力等を勘案して、概念形成訓練遂行の可否、行なう場合の程度を決定せねばならない。

II 訓 練 生

本稿で訓練の対象となる訓練生の能力等のレベルについて述べる。

1. プロフィール

①性別—女性。②年齢—22歳。③失明原因—角膜混濁による眼球病。④視力—左右共に0。⑤失明時期—一生後8ヶ月。視覚的経験は全くない。⑥聴覚、肢体—異常なし。⑦学歴—公立盲学校高等部卒業。同校に小学部より在籍。

2. 歩行能力のレベル

①日本ライトハウス（図1のL、以後LHと略す）から神戸屋まで9時間で単独歩行許可（図1参照）。

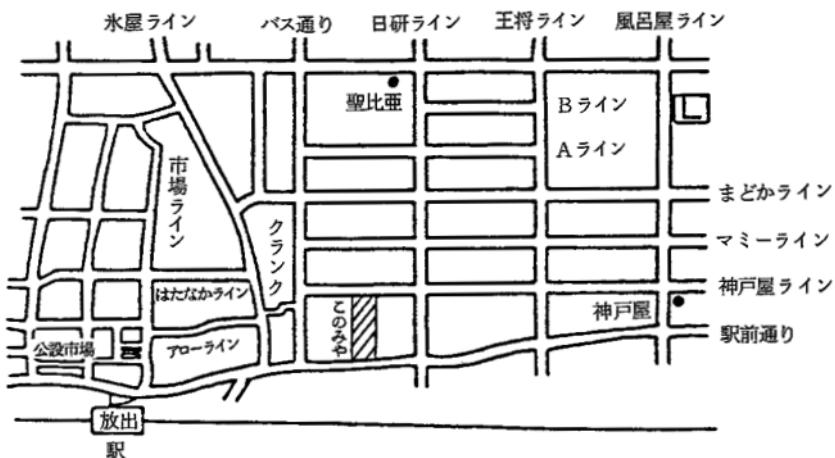


図1 日本ライトハウス附近の地図

② LHから放出駅まで25時間で単独歩行許可。歩行能力のレベルとしては少々低い。平均では神戸屋まで約7~8時間、駅まで約20時間で単独歩行許可。

③訓練開始当初は単独歩行に不安をいだき、歩行に自信が持てないと訴える。

3. 概念のレベル

①「○行一方通行」、「○向きに歩く」等方角、方向を含んで行動を表現する用語、言葉の意味が理解できない。

②SOC（入り込んで横断すること、詳しくは視覚障害研究第16号参照）で横断後、逆方向へ行く（図2）。

③逆のコース（復路に往路と同じ道順を使用すること、視覚障害研究第15号参照）で出発点へ戻ることが不可能。

④「すみきり」の意味、形が説明後も理解できない。

以上がここで述べる訓練に入るまでの本ケースのレベルである。歩行能力面では低い方であり、概念的にもかなり低いレベルである。概念面での特別訓練が実施されなければ、単独歩行範囲がかなり限定されるほどのレベルである。

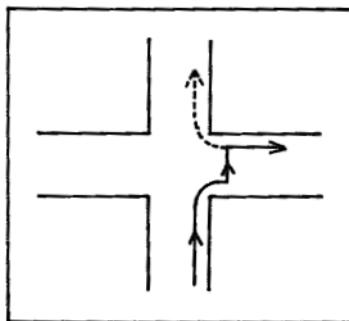


図2 SOCで横断後、点線の方へ行くつもりが実線の方へ行く

III 訓練目標（目的）

本稿で詳述する概念形成訓練の目標（目的）は「S-D（目的地発見、視覚障害研究第15号参照）を本人のコース選定（指導員の指示した条件を満たしたもの）により可能とさせる。」とする。現実的には、出発地点を「神戸屋」に、目的地を「聖比亞」として前述のS-Dを行なわせる（図1）。

本ケースにとってこのS-Dには、方角（応用を含む）、区画、交差点、T字路等の理解が必要であり、概念面ではこれらの理解を訓練目標とする。

IV 訓練手続

本訓練に入るまでに基本的な定位と移動技術の指導を含め、計33時間の訓練を行なった。それによって歩行可能（単独歩行許可）となった地域、場所は、放出駅、公設市場、このみや等を含む神戸屋ライン（以下、ラインは ℓ と略す）及び聖比亞を含む八間道路であった（図1参照）が、これらはほとんどFamをくり返すことによって可能となったものである。

1. 訓練方法

訓練は、「事実の呈示」を基本にし、初期に説明（何故、そうなるのか）による指導は行なわない。

区画について指導する場合、区画整理されている地域で、ある道路Aに沿って歩行する場合、各交差点での横断する道路（道路名）はその歩行している道路Aと平行の道路Bを歩行しても同じであり、横断する道路の順序も同一であることを理解させる。たとえば、図1で神戸屋 ℓ を風呂屋 ℓ から西へ向って歩行した場合、横断する南北の道路は順に、王将 ℓ 、日研 ℓ 、バス通りとなるが、神戸屋 ℓ と平行のマミー ℓ を同様に歩行しても横断する道路はやはり、王将 ℓ 、日研 ℓ 、バス通りの順となることを理解させる。これは、区画を理解させ、コース選定を可能にさせる基本となる課題である。

〈指導例〉

神戸屋 ℓ で各々の南北 ℓ （風呂屋 ℓ 、王将 ℓ 、日研 ℓ ）を指導（Fam）してあり、本ケースは理解している。

- ①。手引きにより、八間道路を風呂屋 ℓ から西に向ってバス通りまで歩き、各交差点に来た時にその横断する道路名をたずねる。
 - 答えられないため、王将 ℓ 、日研 ℓ 、バス通りであることを教える。
 - 「神戸屋 ℓ と同じか」と不思議そうにしている。
- ②。次にまどか ℓ を歩いて同様にたずねる。
 - やはり、答えられないため指導する。
 - 「まさか」という顔をしている。
- ③。マミー ℓ でも同様に質問する。

。「もしかして、王将 ℓ ですか？」という答が返ってくる。

。「そうだ」と答えると、その事実に驚く。

以上のように、「何故か？」は指導せず、その事実だけを呈示していく。

T字路の場合でも「T字路とはこういう状態のところをT字路と呼ぶ。」と
いうように理解させる。その後、多くの例を挙げていく。

〈指導例〉

LHから駅へ行く場合、

図3のコースを使用し、
本ケースはすでにこのコ
ースの単独歩行が許可さ
れている。

① LH から駅へ向って
歩かせ、神戸屋 ℓ とバス
通りの交差点に来た時、

「神戸屋 ℓ はバス通りで
終わり、これ以上西へは行けないが、こういう交差点をT字路と呼ぶ。」とい
う教示を行なう。ちなみに本ケースは「T」の形を知らない。

②手引きにより、マミー ℓ を西へ向って歩き、バス通りとの交差点まで來た
ら、まだ質問はせず、同様の教示を行なう。

③同様に A ℓ を西へ向って歩き、バス通りとの交差点まで來たら、やはり、
まだ質問はせず、同様の教示を行なう。

④同様に A ℓ を東へ向って歩き、王将 ℓ との交差点まで來たら、今度は「
この王将 ℓ で B ℓ は終わり、もう東へ行けないが、こういう交差点を何と呼ぶ
か？」という質問をする。

。「T字路じゃないかと思う。」という自信のなさそうな返事をする。

。「そうだ。」と答えるが、何故T字路と呼ぶかは指導しない。

以上のような要領で訓練し、その後、「T字路とはどのような交差点か」を
考えさせることによりT字路を経験、学習させていく。

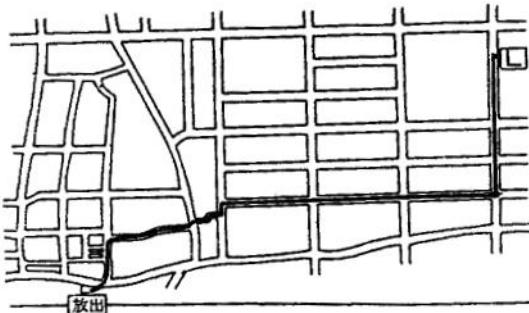


図3 LH から駅までのコース

2. 訓練内容・経過

第1回(訓練時間3時間、累計36時間)

① LH↔バス通り(八間道路)。……OK

② LH→聖比亞…OK

③聖比亞→駅(図4)。

日研 ℓ を使用するコースを考えさせる…ほぼ理解。聖比亞からこのみやまで(点線)は手引きし、後、単独歩行させる。

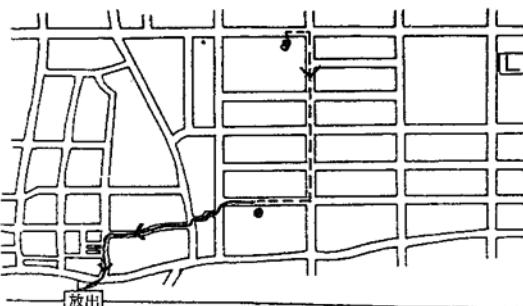


図 4

第2回(7日後、3時間、39時間)

① LH→バス通り(八間道路)

②八間道路とバス通りの交差点(以後、交差点は、八間+バスというように略す)↔駅(図5 点線は手引き)。

ここで、はたなか ℓ を導入(Fam)し、神戸屋

ℓ +バス、マミー ℓ +バスで、T字路を呈示する。

③バス通り→王将 ℓ (八間道路)。

④八間+王将 ℓ →神戸屋 ℓ +王将 ℓ (図5、手引きによる)。

⑤神戸屋 ℓ +王将 ℓ →LH(王将 ℓ 、八間道路)。……OK

⑥LH↔バス通り+マミー ℓ 。ここで、横断する道路名(王将 ℓ 、日研 ℓ 、バス通り)を指導し、T字路(バス+マミー ℓ)を呈示する。

第3回(7日後、2時間、41時間)

① LH→風呂屋 ℓ + マミー ℓ → バス + マミー ℓ → バス + 神戸屋 ℓ → 風呂屋 ℓ + 神戸屋 ℓ → LH。ここで「一周」の概念を呈示する。

② LH→日研 ℓ + まどか ℓ。まどか ℓ は初めてのためか、歩行に自信がない。横断する道路名を教示する。

第4回（7日後、2時間、43時間）

① LH→氷屋 ℓ + まどか ℓ（図6）。⑦地点で路地◎を導入し、◎を北へ行くとどこに出るかという問には答えられず、こちらから指導する。まどか ℓ はまだ自信がなく、王将 ℓ

で SCC による横断後、逆へ行く（図2参照）。

② 氷屋 ℓ + まどか ℓ → 氷屋 ℓ + はたなか ℓ → 氷屋 ℓ + はたなか ℓ（一周、図6、手引きによる）。はたなか ℓ 及び「一周」をもう一度経験させる。

第5回（7日後、2時間、45時間）

① LH→氷屋 ℓ + まどか ℓ（図7）。氷屋 ℓ + まどか ℓ で「はたなか ℓ はどうやらか？」とたずねると、左を指し「南」と答える。「その先に何という道路があるか？」の間にクランクは答えられたが、アロー ℓ が出ず、考えこむ。

② 氷屋 ℓ + まどか ℓ → 氷屋 ℓ + アロー ℓ（図

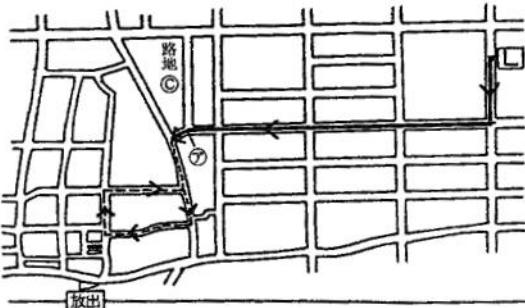


図 6

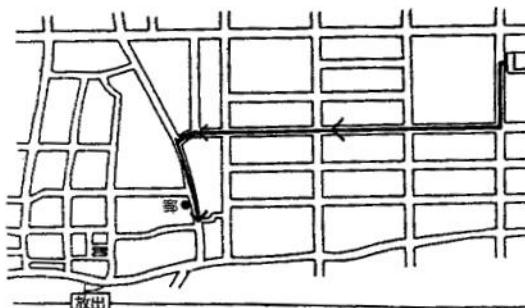


図 7

7)。実際に歩いて、アロー ℓ を確認する。その途中ではたなか ℓ を確認し、郵便局のFamを行なう。
③氷屋 ℓ + アロー ℓ → プランタン(図8)。はたなか ℓ を氷屋 ℓ から市場 ℓ へ歩きながら

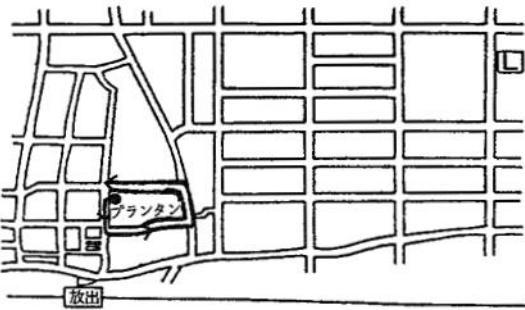


図 8

「このまま行くと何ラインに出るか?」の間に、答えられず、「アロー ℓ と平行だから、市場 ℓ に出る。」と教えると納得する。

④プランタン→プランタン(図8 左回りに一周)。一周の概念は理解できた様子である。

⑤プランタン→氷屋 ℓ + まどか ℓ (図9)。氷屋 ℓ とまどか ℓ の交差点で「このみやへ行くにはどう行ったらよいか?」の間に、氷屋 ℓ を南下し、クラシックを東へ曲って行くコースを即座に答える。それ以外のコースをたずねると、まどか ℓ を東へ、バス通りを右へ曲り、マミー ℓ を横断し、神戸屋 ℓ まで行くことまでは答えるが、神戸屋 ℓ をどちらに行くかがわからない。中途視覚障害者の場合、こういったレベルの質問には即答できる。ましてT字路の概念(バス + 神戸屋 ℓ はT字路で、神戸屋 ℓ は東へしか行けない)が確立されておればなおさらである。T字路については、まだ初期の導入の段階であるので、まだ本ケースは完全に理解していない。

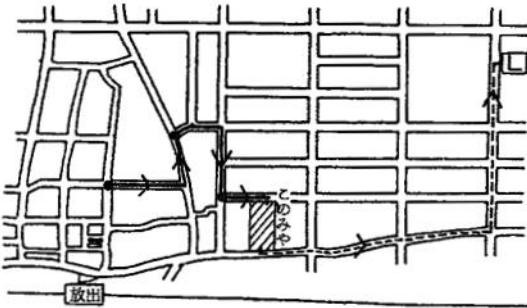


図 9

とりあえず、本ケースのわかる、バス+神戸屋 ℓ まで歩かせる。

⑥水屋 ℓ +まどか ℓ →このみや(図9)。バス+神戸屋 ℓ まで行くと、このみやの位置が理解でき、東へ曲って発見する。概念形成訓練の場合、屋内の机上の説明に終始せず、このように現実にその場へ行って対応することが重要である。この場合も、このみやの隣の工場の騒音(の位置)が本ケースの理解を助けている。

⑦このみや→L H(図9、手引き)。このみやにて、各交差点で横断する道路をたずねると自信なさそうに「日研 ℓ 、王将 ℓ 、風呂屋 ℓ 」と答える。実際に手引きで歩いていくと、その事実に驚く。ここで、「道路はすべて、つながり、どこへでも通じている。」と教示する。区画の概念が確立されてきている。

第6回(2日後、1時間、46時間)

①このみや→水屋 ℓ +
まどか ℓ (図10、一周)

前回の逆コースだが、
コース選定、歩行共問
題なくこなす。

②水屋 ℓ +まどか ℓ →
このみや(図10)。ひ
きつづき一周させる。

問題なし。

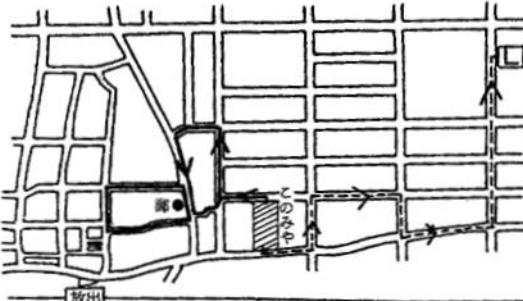


図10

③一周のコース(郵便局→郵便局、水屋 ℓ 、はたなか ℓ 、市場 ℓ 、アロー ℓ 使用、図10)を選定させる。左まわり、右まわり共、選定できる。

④このみや→L H(図10、手引き)。日研 ℓ を北へ曲り、神戸屋 ℓ を東へ曲った後、「次の交差点で王将 ℓ をどちらに曲ると駅前通りか?」の間に、自信なさそうに「右かな」と答える。次に、「その後、駅前通りをどちらに曲ると風呂屋 ℓ か?」の問には「右かな、左かな」と考えるが、結局答えられない。実際に手引きで歩き、指導する。この時、「不思議だ。」と道路がつ

ながっていること、区画の成り立ちを知って驚く。このように、指導者から一方的に指導していくのではなく、訓練生自身に自ら理解させ、「なるほど」と思わせることが重要である。ここで本ケースが驚いたということは、積極的に理解できたことを示すものであり、一つの進歩と考えられる。また、それに加えて、区画を含む概念に対する好奇心の確立や理解しようというモティベーションへと進む伏線となるものである。

第7回(5日後、2時間、48時間)

- ① L H → 風呂屋 $\ell +$ ま
どか $\ell \rightarrow$ 風呂屋 $\ell +$ ま
どか ℓ (一周、図11)。
コース選定……OK。
- ② 王将 $\ell +$ まどか $\ell \rightarrow$
バス + A $\ell \rightarrow$ 王将 $\ell +$
A $\ell \rightarrow$ 日研 $\ell +$ 八間 (

図11、手引き)。A ライン、B ラインを導入

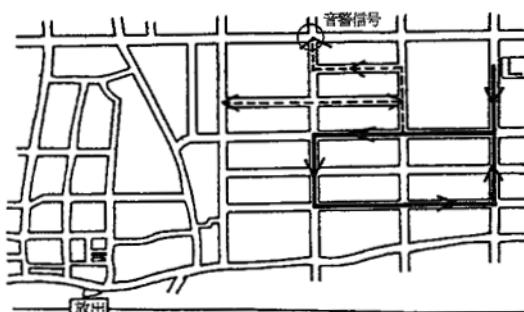


図11

する。歩く前に口頭の説明を行なうが、あまり理解できず、実際に手引きで歩くとその位置関係がかなり明確になった様子。日研 $\ell +$ B ℓ で日研 $\ell +$ 八間にある音響信号が聞こえ「近くにきこえる。」と驚く、一筋がかなり距離のあるものであるという観念をもっていたらしい。この音響信号など視覚にかわる聴覚的なランドマークを使って、一つの交差点「ア」にいながら、隣接する交差点「イ」の存在、方向、自分を含む交差点「ア」との位置関係を認識させることは区画の概念形成の一助となるもので非常に重要なことである。

- ③ 聖比亜 → L H ……OK
- ④ 触地図を使用して今回歩行したコースを確認する。この場合の触地図は区画を理屈により表現したものであるから、訓練当初は呈示せず、区画についてのいくつかの事実を学習してきた現段階で呈示し、歩行コースの確認に使

用する。しかし、それ以外の区画についての詳細な説明は加えない。ここでは、本ケースが時間をかけて、確認でき、その結果として何か付加的な発見を自らするかもしれないということを期待して、とりあえず、貸し出す。

第8回（2日後、1時間、49時間）

- ①王将 $\ell + B \ell \rightarrow$ バス
+ まどか ℓ (図12) 各
交差点に来た時、横断
する道路名を口述させ
る。……OK
②バス + まどか $\ell \rightarrow$ バ
ス + A $\ell \rightarrow$ 王将 $\ell + A$
 $\ell \rightarrow L H$ (図12)。同
様に各交差点に来た時

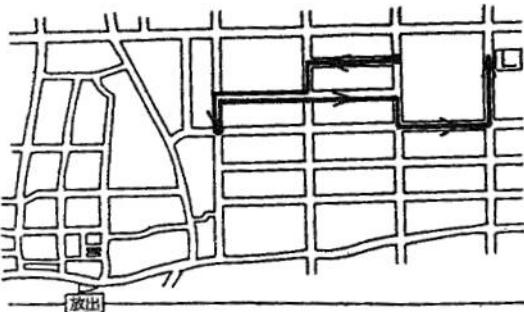


図12

その横断する道路名を口述させる。……OK。ここで、普通なら、バス + ま
どか ℓ からまどかラインを東へ行って LH へ帰るのが順当だが、A ラインを
使用しても帰れることを指摘する。この時は特に驚く様子もなく、理解する。
モビリティ一面では能率性が確保されている。触地図はまだ貸し出したま
である。

第9回（12日後、2時間、51時間）

- ①神戸屋 \rightarrow 聖比亞 (図
13)。ここからいよい
よ S-D に入る。今回
は第1回目なので、本
ケースに自由にコース
を選定させる (図13)。
今回が日研ラインの神
戸屋ラインから八間道
路までの単独歩行はは

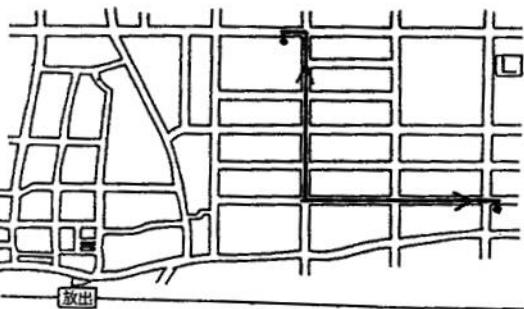


図13

じめてであるが、この訓練では、(1)日研ラインでの歩行、(2)日研ラインから八間道路への左折、(3)交差点横断が大きな目的及び課題である。(1)及び(3)については特に大きな問題点はみられなかったが、(2)の、一つの道路から2車線、歩道つきの道路へ出ること及びその逆は、安全性、能率性の両面から歩行訓練では困難な課題の一つであるが、今回は、能率的な左折が行なえなかつた。

②聖比亞→神戸屋（図13）。やはり、八間道路から日研ラインの右折に失敗。また、横断した交差点が確実に確認できておらず、まどかラインで、「マミー」と答える。今回はモビリティー面でのミスが目立つ。

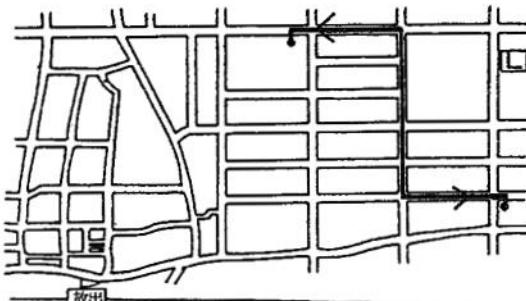
第10回（1日後、1時間、52時間）

①神戸屋→聖比亞（前回と同コース）……OK

②聖比亞→神戸屋（前回と同コース）。日研ラインで、Aライン、まどかラインの横断の際、大きくペアリングする。自力で回復できず。

第11回（1日後、1時間、53時間）

①神戸屋→聖比亞（図14）。王将ラインを使用するコースを選定するよう指示。図14のコースを選定する……OK 歩行は全体的に大きな問題はみられなかったが、可能になっていたはずの信号利用が不完全になっている。



②聖比亞→神戸屋（図

14）。逆コース選定…

図14

…OK。王将ラインの東側を歩いた場合、Aライン、Bラインのないことを説明する。

第12回（4日後、1時間、54時間）

①神戸屋→聖比亞（図15）Aラインを使用するコースを選定するよう指示。

図15のコースを選定する……OK。モビリティ一面で、SOCでの方向づけ（直角）の失敗やペアリングがあったが、自力で回復する。

第13回（1日後、
2時間、56時間）

①神戸屋↔聖比亞（図

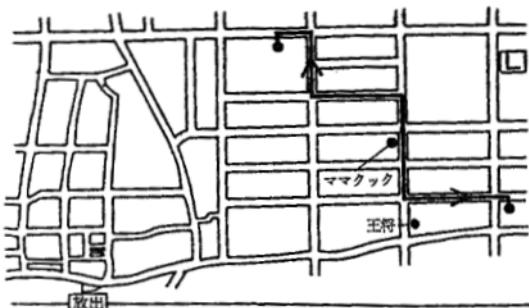


図15

15）……OK。「歩くのが楽しくなった。王将やママック（図15）へ行くのにもいろんな道から行けることがわかり、実際にやってみた。」と述懐する。貸し出していた触地図を使用して、今までの歩行軌跡及び、今回のS-Dのコースを確認する。

V 考 察

以上の訓練で初期の訓練目標は達成され、一応の成果をみた。ただ、当然のことではあるが、今回の訓練で区画についての概念がすべて理解されたわけではない。また、今回、学習できた内容が他の地域で応用できるものであるかどうかは今後の機会を待たなければならないが、現段階では、訓練時間数が限られたせいもあり、応用できるという可能性は低い。しかし、本ケースにとって、換言すれば、本ケースのような能力レベルの訓練生にとって、この種の訓練が長期的に継続実施されれば一つの大きな成果が期待できると考えられる。

本稿で述べた方法は成人だけに限らず、視覚障害児・生徒にも応用できるものであるが、原則的には、先天性の視覚障害者は幼小時より長期的な概念形成の指導が必要で、そうでない場合、成人になってからの指導は、明らかに手遅れの状態である。本ケースの場合も本ケースにとって必要な概念のはんの一部をかなりの時間を要して獲得させたわけであり、到底、晴眼者レベルの概念を

形成させるのは不可能である。

先天視覚障害者に、少なくとも歩行する際に困まらない程度の概念を形成させるためには、幼小段階から、周囲の両親を含む家族、親戚、保母（盲学校の寄宿舎及び盲児施設）、教師などが意識的に数多くの経験をさせることが必要である。図16は視覚障害児に概念を形成させる過程を簡単に示したものだが、本稿で述べたように、まず、理屈ではなく、数多くの、特に抽象的な物についての経験を就学前にさせておく。方角、方向

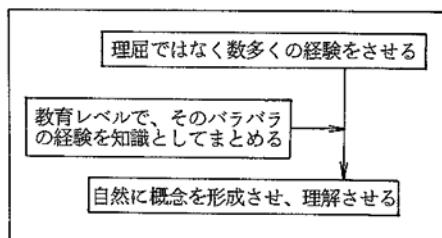


図16 盲児の概念形成

等についての言葉はその視覚障害児が理解するしないにかかわらず、周囲の者が使用するということが重要で、こういう類のこととここで言う経験に含まれる。教育レベルでそれを知識として昇華させることにより、概念の自然な形成を計っていく。先天性の全盲者だけでなく、弱視者にも概念形成上の問題が少なからずみられるため、この概念についての指導は弱視児にも実施されなければならない。

先天視覚障害者の概念形成の不十分さは、歩行だけに限らず、日常生活全般、職業、人間関係に至るまで影響を及ぼすことが多く、成人になるまでの各過程で系統だった指導は必要欠くべからざるものである。

おわりに

先天視覚障害者は歩行訓練の中で、この概念に関する課題で苦しむことが多い。晴眼者にとって「歩行」は散策や散歩という形をとるなど、決して心身共に苦痛を伴なうものではない。しかし、視覚障害者にとって「歩行」は、移動面、定位面において、晴眼者には想像できない身体的精神的負荷があり、決して楽なものではない。少なくとも、概念についてはそれ程苦しまなくてよいような配慮がハビリテーションの段階でなされ、成人段階でも不必要的プレッシャーをかけることなく訓練を行なうことが大切である。

参考文献

芝田裕一 歩行訓練セミナー(3)・歩行訓練関係用語集、視覚障害研究第15号、日本ライトハウス、1982

芝田裕一 歩行訓練セミナー(4)・S O C、視覚障害研究第16号、日本ライトハウス、1982